

## おばけの季節【小咄篇】

陽羅 義光

十年一昔というから、五昔前。  
文才のない先輩が、私の小説をいくつか読み、  
「こんな清潔なものを書いていたら偉くはなれない」  
と断言したものでした。  
それでいささか不潔な作品を読ませたところ、  
「こんな清潔なものを書いていたら偉くはなれない」  
とまた断言したものでした。  
それでめちゃくちゃ不潔な作品を読ませたところ、  
「ぜんぜんだめ」  
という。  
「これでもだめか」  
「だめだめ。尾籠（びろう）なことを書かないとだめ」  
「痔瘻（じろう）か」  
「似たようなものだが、つまりいわば、糞、小便、屁。小説に一番必要なものはそれだ」  
なぜ必要かは問わず、そんな汚いことは書けないと、この先輩とは絶交しました。  
私が偉くなれなかったのは、そのせいではないとおもうのですが、最近になって、  
あんがいあの先輩のいったことは本当かもしれん、とかんがえることがあります。  
なぜなら、小説は人間を書くことであり、人間がほとんど毎日していることは、  
セックスでも暴力でも思索でもなく、糞、小便、屁、なのですから。  
てなわけで、遅まきながら偉くなろうとおもい、糞、小便、屁、（むろんこれは  
象徴なのでしょうが）を書くことにしました。  
でも、照れくさいので、ごく短い話にします。

\*なお、この章は、十歳未満と九十歳以上は、読んではいけないことになっています。

禿光山人 拝

\* \* \*

正月のこと、村の若いもんが、餅を喉につまらせて、死にそうになりました。

「金ちゃん、【もちとり】をよんどくれ」

と若いもんの母親がいうので、ぼくはよんできました。

すぐさま【もちとり】が、青息吐息（あおいきといき）の若者の口を吸うと、餅は若者の喉から【もちとり】の胃のなかに落ちました。

すると、元気になった若者は【もちとり】を罵倒（ばとう）して、

「ばかたれえ、どうして俺の胃のほうへ餅を落とさないんじゃ、せっかく食ったのによお」

すると【もちとり】は、こんどは尻を若者に押し付けると、うんこになった餅を若者の胃のなかへ噴射（ふんしゃ）しました。

若者は再び青息吐息になりました。

あとで懐爺が、

「【もちとり】を怒らせると、いのちとりですよ」

といいました。

\* \* \*

これも正月の話。

村の火の見櫓（ひのみやぐら）の上で、山田兄弟がでかい声で会話しています。  
「あの富士山の雪がよう、みんなとろろ汁ならよう、俺はいくらでも飯を食って、いくらでも糞をひってみせるぞ」

と弟がいいます。

「あの富士山の雪がよう、みんな砂糖ならよう、俺はいくつでも芋を食って、いくらでも屁をひってみせるぞ」

と兄がいいます。

その声が祠にいる懐爺とぼくの耳にも届きました。

「困りましたねえ、【なだれふじ】にやられてしまいますよ」

慌ててぼくは、火の見櫓にむかって走りました。

しかし間に合わず、山田兄弟は【なだれふじ】にやられてしまった後でした。

弟は膨大な糞で圧死し、兄は膨大な屁で窒息死していました。

それ以来、火の見櫓に昇るのは禁止されました。

\* \* \*

村には山田兄弟のほかに、田中兄弟という有名な阿呆兄弟がおりました。  
兄は、弟の尻の毛を抜くのが趣味で、弟は、兄に尻の毛を抜かれるのが趣味でした。

懐爺にいわせると、

「田中兄弟は、いずれ遠からず、【けずき】に狙われますね」

その【けずき】の正体は教えてくれませんでした。あるとき、兄が弟の尻の毛を抜いているときに、弟がすごい屁をしてしまったそうです。

その屁の圧力で、兄は目がつぶれてしまったそうです。

それでしかたなく、趣味は終わったのですが、そのとき兄弟は、【けずき】にひどく叱られて、言葉にいけないくらいのひどい目にあったそうです。

「どうして【けずき】にやられたのかのう」

と懐爺にきくと、

「兄弟の趣味を見るのが、【けずき】の一番の愉しみですからねえ。それがなくなったので怒り狂ったのです」

とのことでした。

\* \* \*

大山にでっかい松茸が生えたというので、村中で採りにいきました。

ぼくも大きな籠を背負って大山を登りました。

その前に懐爺に、

「金ちゃんはやめておきなさい、女ならいいけど、男が【おおまつたけ】を採ると、おかまになっちゃいますから」

と釘をさされていたのですが。

残念ながらぼくは【おおまつたけ】を採れずに、採れたのは村長の長男の、権太だけでした。

その翌日、村長は嘆きに歎きながら、

「あの男の中の男だった権太が、男の中の女になってしまってなあ」

とのことでした。

「【おおまつたけ】はどこじゃ、ごんたのはらのなかかのう」

ときくと、村長はいいにくそうに、

「権太の尻の中よ」

といいました。

\* \*

村長の次男の権助は、なんでもかんでも値段をつけるわるい癖がありました。懐爺にいわせると、  
「そういうことは一番卑しいことですから、【いやしいね】に遠からずやられますね」  
ぼくは遊び半分に権助のところへ行って、  
「わしのちんぼこに、ねだんをつけてみろや」といってみました。  
権助はせせら笑って、  
「金ちゃんのちんぼこは、ちっちゃいから十円だ」といったのです。  
ぼくは頭にきたので、懐爺のせりふを真似していいました。  
「そういうことばかりやると、【いやしいね】にやられるぞい。わしはおまえのことを、しんばいしていっとるんじゃ。きをつけたほうがいいぞい」  
すると権助は、  
「俺だって【いやしいね】にはやられたくはないから、反省するだ。金ちゃんのいまのありがたい言葉は、百万円の値うちがあるだ」  
権助が【いやしいね】にやられたのは、いうまでもありません。

\* \*

お寺の庫裡（くり）で、くそ坊主の禿（とく）と、しょうべん尼の光（みつ）が、なにやらいちゃついているので、のぞいていると、  
「酒買うてきてくれ」と頼まれたので、酒屋にいこうとしていると、  
光が、死にそうな声で、  
「あちき、死ぬ、死ぬ」といっている。  
禿も、死にそうな声で、

「わても、死ぬ、死ぬ」

といている。

こりゃいかんと、ぼくは庫裡にかけこんで、

「ふたりともしんだら、さかだいは、だれがはらうんじゃ」

さけぶと、ふたりは裸のまま、どこやらに逃げだしました。

あとで懐爺にききました。

「あいつらは、なにしとったんかのう」

「それは【しぬしぬ】という、おぼけごっこですよ」

懐爺は苦笑しながらこたえました。

\* \* \*

くそ坊主の禿が、庫裡で、若い坊主の尻の穴に、指を突っ込んでかきまわしているのを、盗み見しました。

若い坊主が泣いて苦しんでいるので、ぼくは仏様の声色をつかって、

「こりゃ、とくや、なぜに、そんな、ふらちで、ふけつな、ことを、するのじゃ」

すると禿は平身低頭して、

「この世の不思議を解明するのも、僧たるものの使命でござります。この坊主の尻の穴の具合があまりに良いので、奥になにかしかけてもあるのではと、虚心坦懐の精神で探究しておったのでござります」

ぼくはとっさに、懐爺からきかされていたおぼけの名をつかって、

「りくつはともあれ、そんなことばかりやっておると、とくや、【ちんぐされ】にやられてしまうが、いいか」

「へへっ、愚僧、こよいかぎり、男断ちはむろんのこと、女断ちもいたしますから、なにとぞ【ちんぐされ】に、よしなにお伝え願ひあげ奉ります」

そんなことをいっても、下半身の病いは簡単に治るものではない、そう懐爺もいっていました。

案の定、断てなかった禿は、【ちんぐされ】にやられてしまいました。

\* \* \*

しょうべん尼の光が、村長の屋敷の塀で立ち小便をしていました。  
それはよく見る光景なのですが、尼寺に植えるのでしょうか、この日は立派な根付きの柳を抱えていました。

村長が見咎（みとが）めて、

「柳に小便がかかったら、腐りますよ。柳はみどりです」

柳をぶんどって、屋敷のなかへ逃げます。

盗んだつもりではなく、村長は植物に造詣（ぞうけい）が深く、いつも植物に情愛を注いでいるのです。

小便をおえた光は、村長を追いかけて、

「鼻はくれないよ」

とさけんだなり、村長の鼻柱に一撃を与えました。

村長の鼻の穴から、夥（おびただ）しい血が吹きでました。

村長は号泣しながら、

「おまえのようなやつは、あの恐ろしい【はなそげ】にやられてしまえ」

するとそれから数日経って、しょうべん尼の光は、本当に【はなそげ】にやられてしまいました。

「【はなそげ】って、なんじゃい」

ぼくは懐爺にききました。

懐爺は【はなそげ】誕生の悲話を、厳かに話してくれました。

以下がそのあらましです。

村一番の可愛い嫁さんをもっている辰吉は、あるとき重い病気になりました。

そのうち、もう駄目だと、辰吉は嫁さんにこういう。

「俺はいよいよ死ぬが、お前が他の男のものになるかとかんがえると、死んでも死にきれん」

嫁さんはけなげに、

「ならば、この髪を切り落としますゆえ、安らかに成仏してくだされませ」

といったものですが、すると辰吉は息もたえだえに、

「髪を切り落とした女を好きな男もおる」

「ならば、脇毛も剃りますゆえ」

「脇毛を剃った女を好きな男もおる」

「ならば陰毛を」

と嫁さんは小刀を手にする。

「そこまで俺のために尽してくれるなら、お前の鼻を切り落としてくれや」

すると嫁さんは、即座に自分の鼻を切り落としてしまいました。  
辰吉はうろたえて、仮病だったことを白状しつつ、  
「俺の嫉妬心のせいで、鼻がなくなったお前にはすまんが、鼻のない女とは共に暮らせんから離縁する」

嫁さんは終始無言でしたが、それ以来【はなそげ】というおばけになったとのことです。

辰吉の鼻のない屍骸が発見されたのは、辰吉が再婚した翌日のことでした。

\* \* \*

これはぼくが、お巡りさんからきいたという、懐爺にきいた話。

桃の節句、十歳のませた、村長の孫娘が下男にいう。

「あたちは、おまえの、おばけみたいなの、【だいこんちんちん】を、みたことがあるけど、【だいこんちんちん】のおくに、ちんざましましているのは、なにものじゃ」

下男は戸惑いながらもいう。

「こやつは【ふぐりん】という、【だいこんちんちん】よりもこわいおばけですぜ、お嬢ちゃん」

「そのこわいおばけを、あたちは、さわりたいものじゃ」

「さわってもええですが、孕（はら）んでもしりませんぜ」

「はらむのは【ふぐりん】よりもこわくはない。あたちは、こわいものがすきなんじゃ」

というわけで、孫娘は【ふぐりん】をさわって、その感触（かんしょく）の気持悪さに、ふるえがとまりませんでした。

あとになって、孫娘が孕んでいることがわかり、孫娘いわく、相手は下男だという。

「【ふぐりん】をさわって、ふるえていたら、【だいこんちんちん】で、はらまされたのじゃ」

お巡りさんがよばれ、下男に詰問するが、下男は否定する。

「だいたい、あっしのは、恥ずかしながら【だいこんちんちん】どころか、南京豆ていどのもんでさあ」

お巡りさんは当然見せろという。

下男は畏縮（いしゆく）しつつ、前をひらく。

まちがいなく南京豆(なんきんまめ)で、下男の疑惑は晴れたということでした。

「ほんまに、げなんは、むざいかのう」

どうにも釈然(しゃくぜん)としないので、ぼくがきくと、

「少女が乙女に、乙女が淑女に、淑女が塾女に変貌するのと同様に、南京豆だって、**【だいこんちんちん】**に変貌(へんぼう)します」

とって、懐爺は困った顔をしたものでした。